

日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース
1999年 秋号 No. 17

ニュース: ミレニアムをになう新役員決まる

先に行われた理事選挙と理事長選挙により、来年4月からの新役員が以下の ように決定しました(敬称略)。新役員の任期は、2000年4月1日から2003年3月31日までです。なお、会員諸氏のご協力により、理事選挙の投票率は前回より5ポイントアップの24.4%でした。

理事選挙による理事の選出(得票順) :
望月 昭 浅野俊夫 島宗 理 山本淳一 小野浩一 佐藤方哉
中野良顕 坂上貴之 杉山尚子 小林重雄
現理事会による理事の選出(五十音順) :
伊藤正人 氏森英亜 鎌倉やよい 河嶋 孝 作道秀樹 長谷川芳典
藤 健一 藤田継道 藤原義博
監事選挙(得票順) :
井上雅彦 野呂文行
理事長選挙(新理事20名による選挙) :
小野浩一

再選が決まった小野会長に電話でインタビューしたところ、「予想していなかった ので驚いています。もう3年やるのは正直言って辛いのですが、選ばれたからには、学会をさらにパワーアップできるように努力します。今のところは今期をまっとうする のに専念し、来期については十分に充電した後で、斬新なアイデアを出して行きたいと思えます」とのことでした。第2次小野体制が楽しみです(編)。

常磐大学人間科学部心理学専攻森山ゼミ

研究室紹介
佐藤隆弘(常磐大学人間科学研究科)

常磐(ときわ)大学は、偕楽園で有名な茨城県水戸市にあります。1983年に常磐大 学人間科学部が開学し、同時に、人間関係学科心理学専攻が設置されました。小さな キャンパス内に、2学部(人間科学部と国際学部、来年度には、この二つに加えてコミュニティ振興学部が開設の予定)からなる4年制大学と短期大学、そして、短大付 属幼稚園が共存しています。心理学研究室は人間科学部1号館(G棟)の1階と2階 にあり、ここと動物実験棟が、私たちの研究活動の場になります。

それでは森山先生を紹介します。森山先生は、人間科学部が発足した当時から教鞭 をとっています。学部の担当講義は「学習心理学」と「比較心理学」です。内容のわ かりやすさという点では常磐大学1、2位を争うでしょう。このわかりやすさによって、授業への出席行動が強化されている学生も多いようです。森山先生は、学部の講 義やゼミ、卒論指導の他に、大学院修士課程の講義も担当しています。先生の研究テ ーマは、インプリンティングの実験を通じて、人間や動物の愛着行動を検討すること。さらに最近では、インストラクションによる非言語行動の制御といった、言語行動の研究にも取り組んでいます。

現在、森山先生の指導を受けている学生は、学部の3年生が10名、4年生が7名、大学院の修士課程が3名、博士課程が2名です。学部生、大学院生を問わず、共同で 活動することが多いのが特徴です。毎年、他学科から入ゼミを希望する学生がいるの も、ゼミのアットホームな雰囲気と、何より先生のお人柄によるところが大きいよう です。

では、森山ゼミの活動内容について紹介します。毎週火曜日のゼミナール(正式には 学部3年生のカリキュラム)は、3年生、4年生、大学院生の全員が参加して、発表 形式で行われます。この時間に、3年生は毎回1人ずつ順番に『行動分析学入門』の 内容を要約して発表します。さらに、発表者は、発表内容に関連する「ディスカッショ ンテーマ」を提起し、このテーマに沿って全員で議論

を行います。こうして、行動分析についての知識を深めていきます。時にはこの議論が白熱して、ゼミ終了時間を過ぎてしまうこともあります。ゼミの時間では他に、森山先生が応用行動分析の基本的な手法について解説したり、大学院生が『オペラント心理学入門』、『はじめての応用行動分析』の内容を解説したりします。

4年生は、卒業論文のための研究を行うこととなります。各自、自分が興味を持ったことをテーマにして、先生の指導を受けながら研究を進めます。もちろん、基本的には実験的行動分析の手法にもとづいた研究を行うこととなりますが、学生によっては、調査などによる社会心理学的研究を行うこともあります。主な研究対象は、成人（大学生）や幼児、そして動物（ハトやマウス、そしてヒヨコなど）です。卒論研究のために、福祉施設や市内の幼稚園に出向く学生もいます。

この他に、夏休みと春休みには、先生、学部生、大学院生、OBといったメンバーで合宿を行います。夏合宿では、卒論の進行状況の発表、OBの卒論の紹介、実験データ分析のための統計学の勉強などを行います。春休みはスキー合宿を行い、次年度に入る新ゼミ生との親睦を深めます。また、毎年、秋の学園祭では展示を行っています。今年度は、研究活動のポスター展示やハムスターの障害物競走を行いました。このための準備もなかなか大変で、授業の空き時間を利用して、展示物の作成をしたりハムスターの条件づけをしたり…。でも、学生たち自身、楽しみながら準備していました。

次に、大学院生の活動について紹介します。大学院人間科学研究科には、修士課程と博士課程があります。森山先生のもとで学ぶ大学院生は、大学院のカリキュラム以外に週2回の演習に参加します（一つは知覚心理学を研究している大学院生と合同で行い、もう一つは森山ゼミのOBが参加しています）。この場では、各自が順番に、自分の研究テーマに関連する英語文献の内容を発表します。発表は、与えられた時間内に1回で終了させることが基本です。オーディエンス側の先生や大学院生は、発表者に対して質問を投げかけます。議論に時間をとられて発表が時間内に終わらないときもありますが、重要なのはこの議論の方です。文献の内容について先生や他の大学院生と話し合うことで、自分の研究をどのように進めていくべきかが見えてくるのです。

この他に、言語行動に関する理解を深めるための勉強会を行っています。「人間の行動を理解するためには、言語行動を理解しなければならない」ということで、最近では特に「言語行動」の研究に力を入れています。この勉強会はその一環として実施されているもので、森山先生と言語行動に関わる研究をしている大学院生数名の他に、言語学と心理学を専門とする他学科の先生も参加しています。現在は、Cataniaの『Learning』や過去の文献などを読み進め、言語行動の基本的な概念を再確認し、理解するといった段階です。ゆくゆくはSkinnerの『Verbal Behavior』に挑戦！といきたいところです。

続いて実験室を紹介します。常磐大学には、5部屋の心理学実験室と動物実験棟があります。動物実験棟にはハト、ヒヨコ、マウス、ラットなどが飼育されています。動物実験棟には実験室の他に、動物実験を行っている大学院生の研究室があります。寝泊まりできる休憩室も備えてあり、ここで、インプリンティングの実験をしている学生が仮眠をとります。最近では、ハトやヒヨコを被験体として、インプリンティングや模倣学習、推移的推論、スケジュール誘導性行動などの実験を行っています。また、ここでは、学部2年生のカリキュラムである実験実習の動物実験も行われます。2年生の動物実験は、ハトを用いた反応形成の実験です。この実験の指導は、森山ゼミの学部3年生によって行われます（もちろん、インストラクターとなった学部生は、事前に森山先生や大学院生の指導を受けます）。インストラクターとなった学生自身も、指導することによって多くの好子を得ているようです（大変なことも多いですけど）。毎年、何人かの学生がインストラクターを希望して来るのも、インストラクターとなった学生達が、「自分自身の勉強になる」ことや、「教えることの楽しさ」を後輩に伝えるからでしょう。

もう一つ、森山ゼミの学部生と大学院生が使用している実験室として、学習実験室があります。こちらは人間を被験者とする時に用いる実験室で、人間科学部1号館の2階にあります。通称「学習」と呼ばれています。しかし、実験室と言うよりは本当に「学習」室のようだという話もあります。なぜなら、ここで学生達がしていることと言えば、文献読み、プログラミング、データ処理、論文の執筆、発表資料の作成などで、まさに共同研究室になっているからです。大学院生も、大学院の共同研究室フロアが心理学研究室と別の建物にあるので、つついこちらで作業してしまうのです。いつのまにか、この部屋には実験装置だけでなく、心理学関係の本や雑誌、ゼミの資料などが置かれています。ゼミ生以外の学部生が大学院生に質問にきたり、他の研究室の大学院生が資料を借りにきたりすることしばしばで、情報交換の場にもなっています。学習実験室がこういう状態ですので、実験は隣の実験室を拝借して行われます。現在行われている実験は、ルール支配行動、刺激等価性、心的回転課題などに関するものです。数年前までは、押しボタンやインターフェースを自作して、それをコンピュータに接続して実験していましたが、最近では、マッキントッシュに

ゲームパッドやタッチパネルを取り付けて実験を行っています。実験のための制御用ソフトは、大学院生が自らプログラミングします。

森山ゼミでは、自分で問題を設定し、計画を立て、整理して発表することを目標としています。これを一言で言うなら「行動すること」でしょうか。もし森山ゼミに興味を持たれた方は、ぜひ、いらしてみたいでしょうか。ちなみに、お間違えになる方が多いのですが「常磐大学」の「磐」は「盤」ではありません。「皿は石で割ってしまえ！」と、誰かが言ったと言わなかったとか・・・。

「磐」を「盤」と間違えた(編)です。ごめんなさい。実は、学部生時代に、非常勤で来られていた森山先生の講義を受けているのです。すでに15年以上経っているのに、全然お変わりにならないのは、どうしてだろう？といつも首をひねっています。水戸の人魚伝説か？(編)。

私と行動分析学との出会い (2)

リレーエッセイ
中野良顯(上智大学)

フルブライトプログラムについて 1979年3月12日(月)

フルブライトフェローの世話係のアンボーデンハイマーさんから、ベアワルト教授に会って、フルブライトプログラムの在り方について話し合ってほしいと依頼された。

フルブライト委員会としては、これまで全米に幾つかの拠点をづくり、院生を除くフルブライト・ヴィジティング・フェローに対して、月1回のディナーを伴うプログラムを提供している。アメリカ生活への適応とアメリカ文化の理解を促進することがねらいたが、プログラムが本当に役立っているかどうか教えてもらいたいという。私はこう答えた。研究上のことは、外国人フェローが明白なテーマをもち、留学中何をしたいかはっきりしていれば、受け入れ先の研究室のプロフェッサーの指導で専門の会話もできるし、研究室への適応もなんとかなる。しかし市民としての生活を見ると、外国人フェローは必ずしもアメリカの地域社会にうまく適応できていない。またその面は現在のプログラムでは十分カバーしきれていない。感情的交流の可能な隣人をつくるには時間がかかり、また自力ではなかなかうまくゆかず苦勞する。現在のフルブライト支援プログラムは、LAタイムズ本社や他大学訪問など、地域の機関を訪れアメリカ理解を深めるのに役立つ。しかし、それではただありがたいお話を拝聴して帰るだけとなり、フルブライトが感情交流できる地域の友人を作り、緊張せずに腹ふくる思いを吐露して、日頃の緊張を解放することは難しい。もし現在のプログラムを改善するとしたら、こうした地域生活への適応を支援するようなプログラムを開発し追加するのが良かろう、と。

ベアワルト教授は、私の意見に賛同し、今の話を英文にまとめて報告書として提出してくれ、来年度のプログラムにはその報告書を添え、改善策を提案したいという。ベアワルト教授自身、世界中からやってくるリサーチフェローの多くが、感情的には固くなっていて、たどたどしい英語で儀礼的謝辞を述べてるものの、解放された表情をしていないことを長年の世話で感じていたらしい。アメリカ文化は、そしてアメリカ行動主義は、問題を知的に解決することを強調する。研究をやり遂げること、目的的に行動することが強調される。トーク、トーク、トークと、本当によくしゃべる。しかし、傾聴的雰囲気での自発的対話を大切にし、お互いに理解を深めたり、対話の中から重要なアイデアを見つけ出したりするチャンスには十分めぐまれるとはいえない。そこにロジャーズのような「対話」派が生まれる余地があるのだろう。多くの日本人は分けても人間関係を大事にするから、アメリカのビジネスライクな、しゃべりすぎ文化の中に入ってくると萎えてしまう。逆に日本では人間関係を大事にするあまりデータに基づく議論が疎かになる。学会や研究会では昼間の発表よりむしろ夜の懇親会の方が重要になる。

異国の文化を取り入れる場合、ある文化事象がどのような文脈において発達し、元文化にとってどんな意味があったか、それを別の文化に移植する場合、その文化においてどんな意義を生み出すかをよくよくみきわめなければならないと思う。

ホワイトハウス 1979年3月20日(火)

3月19日から院生を除く全米のフルブライトフェローに対して、アメリカ文化理解 特別プログラムが首都ワシントンで開かれる。ホワイトハウスでカーター大統領夫人との会見も含まれているという。UCLAフルブライト支部のボーデンハイマー女史の援助で、東海岸までの航空券が安く手に入り、ニューヨークやボストンのホテルも家族3人で1泊25ドルから30ドルという格安のところ確保できた。東海岸では飛行機より汽車の旅をお勧めするというので、その手配もしてもらうことにした。

18日早朝、ワシントン入りした。ポトマック河畔のリンカーン記念堂やジェファーソン記念堂、ワシントン記念塔、連邦議事堂などを観光した。

19日、いよいよ外務省の応接間での盛大な歓迎会だ。同期のフルブライターで、ハーバード大学に留学した黒田昌裕慶応大学助教授とも再会した。夕方からはメリダンハウスでレセプションが開かれた。

20日はホワイトハウス見学。カーター大統領夫人の都合で会えなくなったが、全世界からのフルブライターが中庭に整列して記念写真をとった。みんな目を輝かせて貴重な経験を楽しんでいた。

21日にはニューヨークに移り、翌22日にはロックフェラーセンターや聖パトリックチャーチやメトロポリタン美術館や近代美術館を見物した。

23日にはニューヨーク州立大学ストーニーブルック校に、ロヴァスの高弟テッド・カーを訪ねた。彼は私たちが付属養護学校と実験施設に案内し、自閉症児の癩癩行動のコミュニケーション機能に関する実験を熱っぽく語ってくれた。

24日は国連を見学し、夕方汽車でボストンに移動した。翌25日は、ロングフェロー記念館とボストン美術館をまわり、夜は黒田さん宅にお邪魔して、夕食をご馳走になった。26日はフリーダムトレイルを歩き、バンカーヒルを訪ねた。27日は東部旅行の最後の日。黒田さんにハーバード大学まで送ってもらい、校内を散策し博物館を見学した。タクシーで空港に向い、そこから雨のロサンゼルスに無事戻ってきた。ニューヨークもボストンも72年、74年に次いで3回目の旅だったが、家族にとって初めての訪問だったので、たいそう印象深い旅になったようだ。

ロヴァス、ビジュ、ワシントン大学 1979年4月11日(水)

ロヴァスが「おごるからランチを食べよう」と誘ってくれた。彼は23歳のとき、ノルウエーからアメリカに渡って来たという。大戦後のノルウエーでは、金持ちは別荘やボートをもち優雅に暮す。貧乏人も社会福祉が整っているのだからそれなりに暮せる。でもそれではやはり面白くない。父はジャーナリストだったが、それほど裕福な家庭ではなかった。祖父は船乗りだったが難破して海で死んだ。祖母はそのとき身籠っていた。5人の子どもたちを抱え、賄婦になってロヴァスの父たちを育てるといふふうだった。

ナチの侵攻のためロヴァスは高校も形ばかりの卒業で、戦後は農場でアルバイトをしたりしていた。ノルウエーでの生活は満たされなかった。そのうえロヴァス家では母親がグレイトマザーで、その影響力から脱出したいという願望もあり、アイオワ州のルター大学に留学した。

ルター大学では1日4時間しか眠らず、猛烈に勉強して1年で学部を卒業した。ただし人類学や社会学など、いわゆるミッキーマウス教科を選んで単位をそろえ、数学や物理学や統計などは全部避けて通った。暗い北欧からアメリカに来ると、全てがキラキラと輝いて見え、4時間も眠ると意識はしゃんとしたという。

大学を卒業すると、グレイハウンドバスに乗り、カリフォルニア州の北、オレゴン州のさらに北のワシントン州に行った。ノルウエーの森に似たワシントン大学大学院に進学した。とても貧しかったけれども、下宿代から何から自分で働いて稼いで大学院生活をやりぬいた。

大学院では、自分がいかに基礎的知識に欠けているか思い知らされ勉強に励んだ。ここでビジュ、ベア、リスレイ、ウルフらと出会うことになる。

ビジュは天才肌の人ではなかったが、周りから傑出した研究者が輩出したのは、人柄が素晴らしかったからだ。温厚な人で、決して他人を悪く言ったりせず、そして家庭生活でも大変幸福な人だった。ワシントン湖のほとりに豪華な家をもち、ロヴァスら学生はそこによく招待され、奥さんの手料理をご馳走になり、ボートに乗って楽しく過ごした。ビジュは研究室の鍵を皆に渡し、秘書も電話も自由に使わせてくれ、学生は自分のしたいように振る舞うことができた。ゼミでは学生同士が自分の研究していることを発表した。相互に学びあった。ビジュは学生を自分の仕事のために使うことはしなかった。学生たちは純粋に自分のための勉強に専念できた。周囲は、結婚していない、結婚していてもうまく行っていない、離婚している人ばかり。ビジュだけが幸福で、その彼がまわりの皆を幸福にしていた。

ロヴァスは、皆が4年くらいで博士号を取って行くのに、数学や統計などに手間取ったので、7年かかったという。

ワシントン大学のビジュの門下から行動分析学の若きリーダーが輩出したのは、ビジュの人柄に加えて、タイミングというか時代のよさがあったためだという。1950年代、精神分析の治療効果について疑問が高まり、アイゼンクの著作にそれがはっきり表明され、みんながサイコセラピーの効果を疑い出した。そういう時代精神があったからこそ、60年代初頭に行動修正が名を馳せることができた。また60年代から70年代はベトナム戦争に対する批判に象徴されるようにあらゆるエスタブリッシュメントに対する疑問が高まり、そういう時代の中で新興勢力としての行動修正が優勢になった。

行動修正の基本的枠組みは、ジョーンズやワトソンらによって30年代に提出されていたが、その後20年、大した発展をしなかったのは、精神分析やカウンセリングの方がセックスやその他の人間の興味ある現象に光を当ててくれたからだ。こういう時代にあって、スキナー、アズリン、アイオウンなど天才肌の人々がいた。

ビジュがワシントン大学を去ってイリノイ大学に移ったのは、ワシントン大学の心理学部長との争いがあったからだ。学部長はホモセクシャルで、結婚と離婚を繰り返して、ホモバーで捕まったりして、大学あげてのすったもんだの中にビジュも巻き込まれ、その結果不承不承イリノイ大学に移ることになった。ワシントン州は、それほど魅力的な土地だった。

今日おごったのは税金をうまく計算できたからだ。「日本では税はどうなっている?」。「サラリーマンからガッポリとって、医者や企業は優遇されてる。政府は消費税を導入しようとしている。庶民は従順なので不平を言いながら払っている。アメリカでは提案13のように、住民自身が税を決める意識があると思う」と言うと、「その通り。ノルウェーも日本と同じだ」といった。

梅津耕作氏への返事 1979年5月1日(火)

午後ロヴァスの講義を聞いてから、研究室で日本の梅津耕作氏あてに代筆で手紙をしたためた。梅津氏らがロヴァス(1977)の『自閉児の言語』(原題「自閉児:行動修正による言語開発」)を翻訳中であり、原著に誤植があるため、昨年暮れに11項目にわたって著者あてに問い合わせの手紙が届いた。ロヴァスは返事を書かずに放っておいたため、催促の手紙が何通も来て、「ヨッシュ、どうしたらいい?」と、暗に返事を書いてくれという風情。それで私が梅津氏からの手紙を読み原著と対照して質問への回答を作り、日本語で返事を書いた。ロヴァスに結果を報告すると安心したようだった。ロヴァスは明日2日からメキシコシティに出かけて自閉症児の指導法のワークショップをしてくるという。彼は、講義、臨床チームの指導、研究、講演、訪問者への応対と実に多忙で、秘書がついていてもなお、そのすべてを丁寧にやり通すことは難しいようだ。

私は東学大で、秘書なしで30人余の自閉症児の臨床研究と、情緒障害学級のスーパービジョンと、大学院生と内地留学生の指導と、けっこう手を抜かずがんばってきたなあ思う。今週は木曜の講義日がミッドタームイグザムでお休みとなるので少しはのんびりしよう。

科学 vs ヒューマニズム 1979年5月2日(水)

今日はとてもバーミなお天気だ。ロヴァスと秘書のフローは、私が昨日梅津氏への懸案の回答を書く手伝いをしたためかご機嫌だ。最近ロヴァスと自分の在り方を比較して、科学と実践をめぐって、次のような感想を抱くようになった。

母子家庭で育った私は、いつも母親から家族のサバイバルに貢献する行動を要求されていた。「いくら頭が良かったって、冷たい人間なら駄目。頭が良くても人間として冷たいなら、頭が悪い方がよっぽどいい。冷たい人間はカーチャンは大嫌い!」が母の口癖だった。それで「自分は駄目な人間かもしれない」という不安をもつようになった。カーチャンの好きな俳優は林長二郎のちの長谷川一夫で、貧しい生活の中で股旅ものの映画を見るのが母子の唯一の楽しみだった。それで勉強しても人さまの役に立たなければ無意味であるという価値観が形成されてしまった。股旅ものの映画が日本庶民に対して果たした役割については、佐藤忠男の評論に詳しく論じられていたと記憶する。こんな学問観はギリシャ神話のプロメテウスにも重なり、人間のために天上から火を盗んできてやり、自分はそのために罰される、そのプロメテウスが私の幼いころの理想像だったような気がする。

だから、科学の探究に徹することに完全にはコミットできない、それが自分かなあと、ロヴァスの身近にいて、彼との対比において思うことがある。例えば、UCLAに治療に来ている子どもたちの中には、クリスのように、高密度治療を数年間適用しても、はかばかしく進歩しない子どもたちがいる。ロヴァスは「週6日も7日もの治療を3年以上もやって、それでだめならこのへんでこのケースは打ち切った方が、子どもにも保護者にもいいと思う」「クリスの母親も、高密度治療の義務から解放され、別の楽しみをもつ権利がある」と臨床会議で発言する。それはその通りだ。そして限られたエネルギーをサイエンティストとして、行動が法則的に変化することの解明に注ごうとする。

愛他主義を口実にサイエンスの探究を疎かにして、ヒューマニストを標榜して売名 行為に走る人々を私も好まない。科学の探究を疎かにすれば、データに基づく最も効果的な対応を提供することはできない。「障害児のために」といいながら、長い目で 見れば「ためになっていない」ことを恥じるべきであろう。しかし科学的探究を優先 させることによって、愛他主義を犠牲にするようなことはしたくない。結局自分は「大学の先生」にはなりきれないのかもしれない。研究者としては不適格なのかもしれない。あるいは帰国して10年もすれば、豹変して結局は「大学の先生」になってしまうのかもしれない。

このことをめぐっていま自分の考えを十分深めているとはいえないが、私にとってはこれからもつこく付きまってくる重大な問題である。

(次号へ続く)

カリフォルニアの乾いた青空を感じさせる中野先生若かりし(?)頃のお話。次号へと 続きます(編)。

中谷彰宏『気持ちが楽になる50のヒント』

シリーズ: 生きがい本の行動分析 (第4回)
長谷川芳典(岡山大学)

シリーズ4回目は、中谷彰宏氏の『気持ちが楽になる50のヒント』(三笠書房、1997年)を取り上げたいと思う。巻末の著者紹介によれば、中谷彰宏氏は1959年生まれの作家・俳優・演出家。大学生協のインターネット和書検索によれば、1999年12月の時点で、著書・訳書の総数は307点にのぼっている。大学生がかなりの比率で読むと言われているのが『面接の達人』シリーズ(ダイヤモンド社)。また、氏の著書には「50の」が含まれるタイトルが多く、『大学時代しなければならない50のこと』、『朝に生まれ変わる50の方法』、『前向きになれる50のヒント』など、検索でヒットした数だけでも26冊にのぼっている。書名に「ごじゅうの」が含まれる和書は「五重の塔」や「150の」などを含めても207冊しかヒットしないことを考えると、中谷氏が「50の」の第一人者?であることは間違いなさそう。

これまでに取り上げたスキナーや宇野千代は、いずれも人生を長く生きた人。それぞれの生きざまが強く表れていた。これに対して、中谷氏の場合はまだ40歳を迎えたばかりということもあるのだろうか、「こういう見方もあります。お好きな部分だけ 取り入れてください。」という形で読者の選択に委ねる形式をとっている。

この本は題名が示すとおり、厳密には「生きがい本」というより「慰め本」あるいは「励まし本」に相当するものだ。現実の悩み、停滞・閉塞状況をどう解消するかについて、ヒントを示すという形で拘束性の少ない提案を行っている。それぞれのヒントには根拠は殆ど示されていない。それを採用するかどうかは読者のフィーリングにかかっている。それだけにレトリックで勝負しているとも言える。ただ、中身の大部分はどこかで聞いたことがあるというような常識的なもの。レトリックそのものにはオリジナリティがあるにせよ、本質的に提示しているものは昔から言い古されている 処世訓と大差ないと言えないこともない。

いわゆる「慰め本」や「励まし本」の中には、「非合理的、非論理的な思いこみや 価値観を変容し、自己実現を促進する...」(川島書店『論理療法に学ぶ』紹介文より) というように、論理療法を応用もしくは手本とした一般向けの本が多く出回っている。今回の本も論理療法的な記述は多々見られるが、むしろ「論理的思考を停止し、非合理的なアナロジーによって、とりあえず現状から立ち直る」という手法のほうが多いようにみえる。

例えば「人生は、神様が作ったジェットコースター。事故が起こるようなら、神様 は営業停止になるはずだ。」(p.46)という文言は、科学的、論理的には何の根拠もない。しかし本人が、(1)人生は神様が設計したものだ、(2)神様が事故を起こすような設計をするはずはない、(3)機械よりも設計者を信じれば怖さは克服できる...というように納得さえしてしまえば、当面の不確定な将来に対する不安を解消することができる。

同じような手法は他にも多々見受けられる。「神様はおそば屋さんの出前のようなもの」(p.18)、「人生は、カレーのようなもの」(p.40)、「人生は、綱渡りと同じ」(p.48)、「人生は、スイカと同じ」(p.60)、「ペンギンだって交代で寒い風上に立っている」(p.70)、「背の低いキリンは、低いところにある固い葉を食べることができる」(p.72)、「人間は、オートマチックの車だ」(p.106)など。

これらを行動分析的な視点から見るとどうということになるだろうか。「AはBのようなもの。BはCだ。よってAについてもC'のような受け止め方ができるはずだ」というロジックだからと言って刺激等価性と関連づけるのは少々大げさかもしれない。むしろ、(1)ペンギンは交代で風上に立つ、(2)人間はペンギンよりも優れた動物である、(3)あのペンギンでさえ交代で風上に立つのだから、人間であるわたしも進んで損な役を引き受けよう...というコントラスト効果を狙ったものかもしれない。その他、ぼんやりとした悩みをアナロジーを媒介にして具体化していく、という動きも考えられる。とはいえ、身の回りの外部刺激状況を改善するものではないのでその効果はおのずと限界もあるだろう。

アナロジー的な慰めは論理的根拠を追求すればするほどボロが出てくるので、理屈っぽい人間には通用しない。しかし、本当に落ち込んだ者が、その状態で合理的な思考に徹することができるとは思えない。とりあえず元気を取り戻すためのきっかけとして有効に働く場合もあるだろう。上記の論理療法の場合も含めて、自省的な行動において何が強化因となっているのか、何が確立操作になっているのか、といった問題をさらに細かく見ていく必要があるように思う。

相当理屈っぽい自分ですが、苦しいときにはアナロジーを使って自らを慰めたりします(「平坦な人生より、山あり谷ありの人生の方が面白い」など)。確かに、こうした言語行動は、一時的に嫌悪的な状況を軽減することで強化されているようにも思われます。「認知的不協和」とか「昇華」とかを行動分析学から考察したら面白そうですね(編)。

報告: 特別公開講座「心理学とはどんな学問だろう」

望月昭(企画委員会)

「人と、そして自分自身と、もっとうまくつきあうには？」という副題のもと、標記の高校生向けの特別公開講座が、去る10月23日に、「単位制」という新しい教育システムで知られる都立新宿山吹高等学校との共催で開かれました。主催者および講演者などを除いた参加者は、計67名、うち高校生が24名(うち2名は父兄)、43名が、現職教員、専門学校生、大学生などでした。数から言うと、高校生が少ないようにも思いますが、本当に興味を持つ人たちが自発的に参加してくれたことが、講演中の質問や後のアンケートの内容からもわかりました。遠くは千葉県あたりからも参加してくれたようです。

当日は、新宿山吹高等学校の安井校長の挨拶に始まり、行動分析学会のベテラン会員による円熟した講演、そして最後には活発な議論が高校生と講演者の間で行われ、単なる高校生向け講演会という以上の有意義なセッションであったと思います。

まず、「ぷろろーぐ」として、日本大学の河嶋孝先生から、心理学の中における実験的行動分析、応用行動分析の位置づけ、とりわけ科学としての心理学の在りようの重要性が説明されました。「心理学は実験的行動分析と応用行動分析の2つからなる」というあまりにも明快で“正解”な解説には、(実は司会者には内々予告されていたとはいえ)一瞬どきどきさせられましたが、後の高校生のアンケートで「サクサクした解説がよかった」と好評(「心理学の中には・・・」と言ったと後に河嶋先生談もあり)。

この後、まず愛知大学の浅野俊夫先生から、「動物にも心理があるのか？(動物実験からわかること)」のタイトルの下で、霊長類の中でのヒトの特異性、行動の原因の捉え方といった心理学の基本コンセプトの問題から、本能行動、インプリンティング、オペラント条件付けなどについて、「バッタのオペラント条件付け」などの動物実験を紹介しながら、行動分析学の基本的な枠組みについての解説がなされました。次に、応用的展開として、まず吉備国際大学の小林重雄先生が、「人を助ける心理学(障害児教育や福祉援助の方法として)」というテーマで、近年の障害児教育および福祉の流れの中での応用行動分析的な方法について、行動アセスメントや実践デザインなどに関する事例も含めながら最近の研究例を紹介されました。アンケートでは、調理実習が心理学の題材になっている点が印象的とのコメントがありました。最後に、上智大学の中野良顯先生は、「生活や仕事をより良くするために(セルフ・コントロールの心理学)」のタイトルで、千葉敦子氏のメッセージから始まり、セルフコントロールとはどのようなものか、そしてそれを実行する具体的な方法などについて、ラットの行動形成シーンのビデオなども使用して解説され、最後に「自分の感受性くらい」という茨木のり子氏の詩で締めくくられました。身近な話題でもあり、また詩に始まり詩で終わる内容は、高校生諸君にもインパクトがあったようです。

講演後の質問の時間では、セルフコントロールが困難な理由への問いかけ、心理学と工学との

関連についての科学的な意見、戦争はなぜ止められないのか、夢とは何か、など多岐にわたり、かつレベルの高い質問が次々と高校生諸君からなされ、それに応える講演者とのやりとりはなかなか聞き応えのあるものでした。アンケートにも「質疑応答が面白かった」とあります。

今回、講演者の方には、それぞれ30分から40分の間で、決してレベルを下げることなく、話をしていただくようお願いしてありました。この短い時間の中で、いかにして分担話題のコア的な部分をわかりやすく説明するか、大変御苦労されたと思います。参加した一般会員の側(私も含めて)の、大いなる関心のひとつは、それぞれの先生方が、この課題にどのように取り組んで話をまとめられるか、という点にあったと思います。しかし、さすがベテランの先生方、終わってみると、とてもあのような短時間では難しいと思われる内容を要領よくまとめられて、さすがの感があります。勉強になりました。

当初、果たして高校生諸君が、こうした話題にどれだけ食いついてくれるか、ちょっと心配したのですが、講演中も居眠りする人もおらず、また紹介したように、質問の内容からも、この領域に対する強い関心やなかなか鋭い理解があるものと驚いた次第です。アンケート見ても、大学生より熱心(優秀)じゃないですか(!?)

この高校生向けの公開講座は、なにより我々自身の研究行動や教育行動にも様々な示唆を与えてくれるものと実感しました。今回は、いわばテストショットでしたが、さらなる展開を計画するに値するものであると確信しました。

それにつけても、講演の諸先生方、本当にご苦労様でした。そして会場設営や当日進行の実務に関して、明星大学の野呂先生と学生さん、そして学会事務局の方には大変お世話になりました(コンビニの弁当でごめんなさい)。また、新宿山吹高校の加勇田先生、千葉先生には、生徒さんへのアナウンスおよび当日のセッティングで大変お世話になりました。また発表もお願いした上に、そもそもこの高校での開催についての仲介の労、ならびに様々な段取りをいただいた中野良顯先生に心から感謝致します。

現在、学校教育では「生きる力」や「心の教育」というキーワードが叫ばれています。人間について実践的に理解を深める行動分析学こそ、役に立つのではないかと思います。こうした試みが、今後も続くといいですね(編)。

報告: 北九州発達障害研究会設立1周年記念「公開講演会・事例検討会」を開催して

園山繁樹(西南女学院大学)

北九州発達障害研究会設立1周年記念の「公開講演会・事例検討会」を、本学会をはじめ多数の後援をいただいて盛会のうちに終わることができました。ここで、この行事の報告をさせていただくとともに、行動分析学の普及について若干の考察をしてみたいと思います。

公開講演会の講師は上越教育大学の藤原義弘教授にお願いし、本年度の学会年次大会の口頭発表やシンポジウムで発表されたPBS(positive behavioral approach)に関連して、障害のある人の問題行動を取り扱う上で、QOLの観点からのアプローチを解説していただきました。ビデオとOHPを有効に使っていただき、障害のある人の生活を支援する上で、行動分析学が実際にどのような貢献をなすことができるかをわかりやすく教えていただきました。

また事例検討会では、2歳から27歳まで様々な激しい行動障害を示した、現在34歳になられる自閉性障害のある息子さんについて、お母様に報告をしていただきました。事前に何回かやりとりをし、わかりやすい資料を提示していただきました。息子さんの能力を活かした作業を取り入れた生活を創ることによって、行動障害が劇的に軽減した経過をよく理解することができました。

本研究会の月例会は毎回約50名の参加者があり、記念行事には計124名の参加がありました。月例会には施設職員、養護学校教員、保護者が多く、学生も数名参加しています。本研究会の基本的スタンスは「実践現場に役立つために」ということです。但し、そのためには、事例的な検討を基本としつつ、最新の知識を正しく伝え、検討することが大切と考えています。

最近、本研究会の参加者からの依頼で、運営スタッフが講演の講師に呼ばれたり、事例へのアドバイスを頼まれることも多くなりました。その際に留意していることは、現場で直接支援・援助に

携わっている専門職(あるいは家族)自身の力量が高まるような関与の仕方をするということです。運営スタッフが持っている知識・方法がアドバイスを必要としている人に合うよう可能な範囲でアレンジすることです。そして、アドバイスを求めた人が実際にうまくいった経験をされ、そのことによってさらに行動分析学への関心を深めてもらえたらと願っています。(実際、月例会の参加者の中には、自分なりに行動分析学に関するアイデアを工夫し、実践している人が見られるようになりました。これは、われわれ運営スタッフにとっても大きな強化でした)

11月15日付けの学会メーリングリストを通じて岡山大学の長谷川先生が「縛らない 介護」についてコメントされていますが、激しい行動障害をはじめ、行動分析学が貢献すべき(しなければならない)差し迫った問題・領域はたくさんあります。行動分析学の応用が実験室的場面やシミュレートされた場面からさらに歩みを速め、福祉や教育・保育・看護・企業・地域社会等々、人に関わるあらゆる場面へと広げられることが望まれます。

そのためには、適用する場の様々な要因の分析も必要でしょうし、行動分析家を自認する人たちの自己変革が求められることも必至であるように思います。

運営スタッフ一同、本研究会を通じて、このような問題意識を何らかの形で明確なものにしていきたいと思っています。

なお、この講演会の報告はホームページ (<http://member.nifty.ne.jp/ssonoyama/kouennkai.htm>) に掲載しています。以下は、講師をお願いした藤原先生の感想です。

「今回、栄えある「北九州発達障害研究会」の1周年記念に講演させていただきましたが、会場には、学生、教育・療育関係者、障害児をもつ保護者など多彩な方々が参加され、講演中に厳しい視線を感じるほどの熱心さで、緊張感あふれる会でした。北九州地区の意識の高さを感じさせられました。事例検討会では、激しい行動障害を持つ息子さんを育てられたお母様のとつとつとしたお話ぶりと、よく整理された内容に、私も含めて出席者全員が引き込まれ、実際の子育ての厳しさとそのご努力の様子を身にしみて感じた次第です。本会に参加し、園山先生や野口先生よりこれまでの経緯や活動の一端を垣間見させていただき、この地で本会およびメンバーの皆さんが担っておられるものの大きさを実感した次第です。これを機に、遠く上越でもそのエネルギーを得つつ支援できたらと思っています。」

今後も年に1度はこのような機会を設け、行動分析学が様々な実践分野に用いられる一助となるよう企画したいと思っています。その節には本学会理事会、会員皆様のご協力をいただきたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ニュース: 日本行動分析学会第18回年次大会のご案内

氏森英亜(大会準備委員会委員長)

来年度の年次大会は、9月9日(土)～10日(日)、東京学芸大学で開催されます。研究発表(口頭・ポスター)、講演、シンポジウム、ワークショップ等を企画しております。20世紀を締めくくり、21世紀に向けた有意義な大会にしたいと考えております。多数のご参加をお待ちしております。

なお、大会案内の第1号通信は、12月下旬に送付する予定です。

編集後記

・スポーツクラブでテニスのレッスンを受けだしてから2年。このところ、月に2回は地元のトーナメントに出場するほどハマっています。上達してトーナメントで上位進出するために、当然ながら行動分析学を活かそうとしていますが、なかなかうまくいきません。JABAなどには、テニスのトレーニングに関する論文も掲載されていますが、試合に勝つためには、ストロークが良くなるだけでは不十分で、戦略やメンタルタフネスなどの分野もカバーしておかなくてはなりません。研究トピックだらけです。ちなみに、個人的なホームページで、このあたりの取り組みを公開しておりますので、興味のある方はどうぞ (<http://member.nifty.ne.jp/~simamune/>)。

J-ABAニュース編集局

〒772-0866 鳴門市高島 鳴門教育大学 学校教育研究センター 島宗理

TEL 088-687-6596 FAX 088-687-6100 Mail simamune@naruto-u.ac.jp

皆様からの記事を募集しています。研究室や施設の紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人求職情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイルの形式で、電子メールかフロッピー(DOS/Mac)により編集局までお送り下さい。2000字程度を目安にし、本紙1-2頁におさまるように考えていただければ結構です。次号の〆切は99年8月31日です。尚、掲載された記事の著作権は日本行動分析学会に属し、ホームページへの公開を原則としています。メールアドレスなど、一般公開を望まない情報がある場合には、事前に編集局までお知らせ下さい。

J-ABAニュース第17号

発行:日本行動分析学会

〒154-8525 世田谷区駒沢1-23-1 駒沢大学文学部心理学研究室内

Mail: j-aba@komazawa-u.ac.jp TEL 03-3418-9303 FAX 03-3418-9126